# Luxury in the City

## Post Corona時代において都市の魅力を生み出す建築を考える

### 建築史系スタジオ課題

新型コロナウイルスの感染拡大によって、世界は一変した。学生は大学に登校せず、会社員はオフィスに通勤せず、商業施設はシャッターを下ろした。

しかし世界は、それなりに動き続けた。

この事実は、建築と都市という物理空間の悲劇の幕開けではないだろうか？　わたしたちは、コロナ以前の社会のなかで、情報技術がもたらす未来の社会に夢を描いていたが、実際に訪れたのはディストピアであった。無人のオフィス街、無人の繁華街の風景から、私たち建築の専門家は何を学び、どんな未来を目指せば良いのだろうか？

モダニズム時代の「機能主義」の理念は、建築の合理化を目指してきた。しかし、2020年の世界を襲った災厄は、仮想空間の合理主義が物理空間の合理主義を軽々と超えてしまうことを明らかにした。物理的な移動を伴わず、講義も、遠隔地にいる人とのミーティングも可能にするリモート技術は究極の機能主義である。その一方で、物理空間としての都市や建築は「不要不急」の名の下に、ひっそりとその機能を停止してしまった。

一度リモート技術の便利さを知ってしまった現代社会は、ポスト・コロナ時代においても、完全に元に戻ることはできないであろう。しかし、そこで繰り広げられるであろう「新しい日常」は、本当に私たちが目指すべき姿なのだろうか？　New Norm、Social Distanceなど、なにやら格好よさげな言葉で未来が語られるが、人と人とが２ｍの距離をとり、ビニールのカーテンで遮られ、一人でもくもくと食事をとる未来の社会。建築デザインの歴史は、そんな社会を構築するために、あるわけではないはずだ。

本スタジオでは、ひとつの建築が、都市生活者のために真の豊かさをもたらす可能性を、改めて考えてみたい。豊かさ、贅沢さは、モダニズム時代・合理主義時代の建築が排除してきたものであった。しかしポスト・コロナ社会において、建築と都市が果たすべき重要な役割とは、人々の生活に豊かさをもたらすことであるはずだ。Luxuryという観点から、建築と都市の豊かさについて改めて考えて欲しい。

**スタジオ課題**

東京のなかの狭小敷地に、都市生活者に豊かさをもたらす建築空間を設計する。いわゆる「ペンシルビル」くらいのボリュームで、都市空間のなかにLuxuryと呼べる建築を設計してほしい。その敷地やプログラムについても、スタジオのなかで議論しながら、各自で設定してもらう。

**スタジオの論点**

- 建築の物質性
  - 建築空間におけるLuxuryとは何か？
  - 物質性をひとつの切り口とする
- 建築の都市性・社会性
  - Post Coronaの都市と社会
  - 都市生活者のための豊かさとは

**スタジオ初回ガイダンス**

6月4日（木）13:00から

https://zoom.us/j/94566955496

**エスキス**

スケジュールは、スタジオ内で提示します

**履修条件**

学部生のみ（目安　10名程度）

**指導メンバー**

加藤耕一 ＋ 高橋元貴

常松祐介・橋本吉史・丹羽達也（TA）

**※6月4日までの宿題**

「Luxury」と感じる写真10点を収集する

原則、建築に限る。特に素材の扱い方に注目して収集。なぜ、どこに「Luxury」を感じるのか、説明できるように。6月4日までにドライブにアップロードすること。